



異文化間感受性尺度日本語版作成の試み

鈴木, ゆみ
齊藤, 誠一

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(2):39-44

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009449>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009449>



異文化間感受性尺度日本語版作成の試み Development of Intercultural Sensitivity scale in Japanese

鈴木 ゆみ* 齊藤 誠一**
Yumi SUZUKI* Seiichi SAITO**

要約：本研究では、Chen & Starosta (2000) によって「異文化への肯定的な感情」と定義され、その尺度化が進められている異文化間感受性尺度について検討した。大学生を対象とした因子分析の結果 (N = 332)、原版の5因子構造とは異なり、「異文化への肯定的感情」因子、「異文化へのアンビバレントな感情」因子、「異文化への否定的感情」因子の3因子構造が抽出され、確認的因子分析の結果、因子的妥当性が示された。また、構成概念妥当性の検討では3因子の特徴が示された。「異文化への肯定的感情」は、異文化状況における柔軟性や適応能力、および社会的な手がかりを利用する能力であるセルフモニタリング能力との関連がみられた。「異文化へのアンビバレントな感情」は、肯定的感情とほぼ同様の特徴を示す一方、異文化接触時における不安や緊張の高さとその緩衝材となる自尊心との関係が示唆された。「異文化への否定的感情」は、異文化間の対人場面における柔軟性や適応能力とは関連がみられず、また、異なる価値観の受け入れ難さや自文化中心主義的な態度が優勢であることが、セルフモニタリングとの関連を低めた可能性が示唆された

問題と目的

1. はじめに

Sensitivity という言葉は、中世英語の *sence* (感覚)、*sensory* (知覚) に由来し、さらに古くはラテン語の *sentire*、すなわち 感じる (*feel*) という言葉から形成されたとも言われている (Random House Webster's unabridged dictionary, 1998 ; West, 2009)。このことから、感受性とは、情動および感情領域の概念であるといえる (West, 2009)。したがって、異文化間感受性とは、人間が異文化とかわかるとき、あるいは異なる文化の人々と関わるときの感情や情動に深く関係している (Chen, 1997)。

2. 問題と目的

Bronfenbrenner, Harding, & Gallwey (1958) は、感受性を扱った初期の研究の一つである。そこでは感受性は2つのタイプ、すなわち、一般化された他者への感受性と、対人関係の感受性があるとされた。一般化された他者への感受性とは、自らが所属する集団の社会的規範へのある種の感受性であり (McClelland, 1958)、対人関係感受性とは、他者の行動や知覚、あるいは感情が、いかに異なるかを識別する能力であると考えられた (Bronfenbrenner et al., 1958)。

一方、感受性を日常生活へ適応するための態度として扱う研究

者もいた (Hart, Carlson, & Eadie, 1980)。感受性の高い人とは、人間の複雑さを受け入れることができ、柔軟にコミュニケーションを行い、人間関係に対して自覚的で、考えを修正することに柔軟であり、寛容であるとされた。これらの要素は、認知的、情動的、行動的な次元として捉えられてきた。

異文化コミュニケーションや異文化トレーニングの分野において、異文化間感受性は、感情 (*affect*) を表す概念として発展してきた。Gudykunst & Hammer (1984) の異文化間トレーニングの三段階モデルや、Hoops (1981) の異文化学習モデルに基づき、Benett (1986) は異文化感受性発達モデルを提唱した。これは、個人の世界観 (*Worldview orientation*) と異文化感受性を同義的に捉え、個人が様々な文化差を体験し自らの世界観をより複雑な体系へと再構築していくにつれて、文化差に対する認知・感情・行動面での反応もより多面的なものに変化していく、すなわち、異文化コミュニケーション能力が変化していくと考える。この理論は、世界観、ならびに感受性の変化を発達の視点からとらえている点で非常に特徴的であり、自文化中心主義 (1. 違いの否定 (*Denial*))、2. 違いからの防衛・逆転現象 (*Defense/Reversal*)、3. 違いの最小化 (*Minimization*)) から、文化相対主義的段階 (4. 違いの受容 (*Acceptance*))、5. 違いへの適応 (*Adaptation*)、6. 違いの統合 (*Integration*)) へと発達するものであるとしてい

* 明治学院大学心理学研究科博士後期課程

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2015年9月30日 受付)
(2015年10月15日 受理)

る。

Chen & Starosta (2000) は、これらの研究課題を整理するため、感情的側面である「異文化感受性 (sensitivity)」と、認知的側面である「異文化の気づき (awareness)」そして行動的側面である「異文化場面における器用さ (adroitness)」は相互に関係はあるものの、別個に分けて概念化する必要があるとした。また、その定義については、異文化感受性を「文化差に対する肯定的な感情」とし、文化的器用さ (コミュニケーションに注目した行動的側面)、異文化の気づき (文化差の理解に関する認知的側面) とともに文化的コンピテンスを構成するとした。この定義は、コンセンサスメソッドの一つである Delphi 法によって専門家集団の 80% から 100% の同意が得られた 7 つの定義のうちの 1 つとなっている (Deardorff, 2009)。

その後 Chen & Starosta (2000) は、先行研究を精査し、印象報酬 (impression rewarding)、自己評価 self-valuation、対人注意 (interaction attentiveness)、セルフ・モニタリング (self-monitoring)、視点取得 (perspective taking) 等の概念を参考にした尺度化を試みた。因子分析の結果、「異文化間への没入」因子、「文化的差異への尊重」因子、「異文化への自信」因子、「異文化とかわかる喜び」因子、「異文化への注意」因子の 5 因子が見いだされ、信頼性および妥当性の検討が進められている (Fritz F, Graf, Henze, & Moelnberg, 2005; West, 2009)。

そこで、本研究では、Chen & Starosta (2000) によって開発され、欧米諸国においてその検討が進んでいる異文化間感受性尺度の日本語版を作成し、その因子構造を検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者および調査時期 関東および関西近郊に住む大学生および大学院生 332 名 (男子 59 名、女子 273 名、平均年齢 19.7 歳、SD = 1.22) を対象として大学および大学院の授業を通して質問紙を配布し回収した。調査時期は 2015 年 1 月から 7 月であった。

2. 測定

(1) 日本語版異文化間感受性尺度 Intercultural sensitivity scale: ISS (Chen & Starosta, 2000) 24 項目。原著者 (Chen) に本研究の趣旨を伝え、翻訳の許可を得たうえで日本語版 ISS を開発した。翻訳手続きとしては、まず筆者らが原版を翻訳し、それを英文校正業者に逆翻訳 (バックトランスレーション) を依頼した。逆翻訳後の英文が原版の項目と内容的に等価になるよう、筆者らとアメリカに長期の学部留学経験のある心理学専攻大学院生とともに検討して最終版とした。「まったく当てはまらない」から、「とてもよく当てはまる」の 5 件法であった。

(2) 社会的承認尺度 social confirmation scale (Wheless & Duran, 1982) 5 項目。翻訳手続きとしては、まず筆者らが原版を翻訳し、それを英文校正業者に逆翻訳を依頼した。逆翻訳後の英文が原版の項目と内容的に等価になるよう、筆者らとアメリカに長期の学部留学経験のある心理学専攻大学院生とともに検討して最終版とした。「まったく当てはまらない」から、「とてもよく

当てはまる」の 5 件法であった。

(3) 自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982) 10 項目。「当てはまらない」から「当てはまる」までの 5 件法であった。

(4) セルフ・モニタリング尺度 (Lenox & Wolfe, 1984; 原・水野, 1992) 13 項目。「全くそうでない」から「非常にそうである」の 6 件法であった。

(5) 対人注意尺度 (Cegala, 1981) 5 項目。翻訳手続きとしては、まず筆者らが原版を翻訳し、それを英文校正業者に逆翻訳を依頼した。逆翻訳後の英文が原版の項目と内容的に等価になるよう、筆者らとアメリカに長期の学部留学経験のある心理学専攻大学院生とともに検討して最終版とした。「まったく当てはまらない」から、「とてもよく当てはまる」の 5 件法であった。

(6) 視点取得尺度 Perspective Taking (Davis, 1983; 桜井, 1988) 7 項目。「まったく当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの 5 件法であった。

3. 倫理的配慮

質問紙配布の際には、目的と方法、個人情報保護について、個人への不利益が生じないための配慮、および研究への参加は任意であること等を口頭で説明した。また書面上でも表紙に同様に記載した。質問紙の表紙および内容については、調査開始前に第一著者の所属大学における倫理委員会の承諾を得た。

結 果

1. ISS の因子構造および因子間相関

ISS の 24 項目について、重み付けのない最小二乗法 (プロマックス回転) を行った。はじめに先行研究に倣い、5 因子で因子分析を行ったところ、各因子には原版での 5 つの下位尺度が混在し、1 因子の項目が 2 つ以下のものもあった。また因子の解釈も困難であった。そのため、同様の手続きで、固有値、負荷量平方和、および因子の解釈可能性を考慮して、因子数を変えて同様の方法で分析を行った。その結果、3 因子で分析した場合、固有値が、30.43、11.19、8.40 と続き、第 4 因子以降に説明される分散が小さくなった。回転前の 3 因子の累積寄与率は 50.0% であった。因子の解釈も 3 因子が最も妥当であると判断された。

第 1 因子は、「私は、文化的に異なる人々とかわるとき、できるだけその人について知ろうとする。」「私はたいてい、自分と文化的に異なる人とかかわるとき、肯定的に対応している。」「私は、文化的に異なる人々の振る舞いや習慣を尊重する。」「私は、自分と文化的に異なる相手との間にある違い (差異) について、楽しめる。」といった、異文化に対する積極的・肯定的な感情の項目から構成されたため、「異文化への肯定的感情」因子と命名した。

第 2 因子は、「私は、文化的に異なる人々とうまくかわる自信がある。」「私は、文化的に異なる人々とかわるとき、緊張しやすい。」

Table 1 異文化間感受性尺度についての因子分析の結果

	I	II	III
I. 異文化への肯定的感情 ($\alpha=0.85$)			
私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、できるだけその人について知ろうとする。 (interaction attentiveness)	.72	.01	.05
私はたいてい、自分と文化的に異なる人とかかわるとき、肯定的に対応している (interaction engagement)	.71	-.05	-.04
私は、私は、文化的に異なる人々に対して気遣いをする。 (interaction attentiveness)	.69	-.29	-.16
私は、文化的に異なる人々の振る舞いや慣習を尊重する。 (respect for cultural differences)	.62	-.13	.21
私は、自分と文化的に異なる相手との間にある違い(差異)について、楽しめる。 (interaction engagement)	.59	.22	-.02
私は、文化的に異なる人々の価値観を尊重する。 (respect for cultural differences)	.58	-.12	.21
私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、うちとけた感じでありたいと思っている。 (interaction confidence)	.56	.04	.02
私は、自分とは文化的に異なる人とかかわっているとき、その人が伝えようとしている小さな事にも気を配る。 (interaction attentiveness)	.56	.00	.06
私はたいてい、自分と文化的に異なる相手に対して、言語的、非言語的に自分の理解を示す。 (interaction engagement)	.46	.15	-.05
私は、文化的に異なる人々に対するある種の印象(偏見など)を持たないようにしている。 (interaction engagement)	.39	-.03	.16
II. 異文化へのアンビバレントな感情 $\alpha=0.82$			
私は、文化的に異なる人々とうまくかかわる自信がある。 (interaction confidence)	.20	.75	-.34
私は、文化的に異なる人々と、うまくかかわれると確信している。 (interaction confidence)	.08	.74	-.27
R 私は、文化的に異なる人々とかかわるとき、緊張しやすい。 (interaction enjoyment)	-.55	.71	.10
R 私は、文化的に異なる人々を前にすると、話しづらと思う。 (interaction confidence)	-.16	.59	.18
R 私は、自分と文化的に異なる人々と関わらなければならない状況をできるだけ避ける。 (interaction engagement)	.12	.50	.32
私は文化的に異なる人々とかかわるのが楽しい。 (interaction engagement)	.42	.50	-.15
R 私は、文化的に異なる人々とかかわることが、好きではない。 (respect for cultural differences)	.26	.42	.30
III. 異文化への否定的感情 $\alpha=0.68$			
R 私は、文化的に異なる人々に対して、がっかりすることがよくある。 (interaction enjoyment)	-.05	-.04	.61
R 私は、文化的に異なる人々は、心が狭いと思う。 (respect for cultural differences)	.04	-.08	.60
R 私は、文化的に異なる人々の意見(考え)を、受け入れられないだろう。 (respect for cultural differences)	.12	.04	.59
R 私はしばしば、文化的に異なる人々とかかわることは、自分にとってあまり役にたたないと感じる。 (interaction enjoyment)	.17	.16	.51
R 私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う。 (respect for cultural differences)	-.02	-.18	.39
因子相関行列	I	II	III
I		.51	.46
II			.27

R のついた項目は逆転項目を示している。
重みづけのない最小2乗法(プロマックス回転)

Table 2 異文化間感受性と妥当性確認のための尺度との相関

	視点取得	対人注意	社会的承認	自尊心	セルフ・モニタリング
異文化間感受性全体	.32***	.22***	.32***	.18**	.21***
肯定的感情	.34***	.18**	.35***	.04	.22***
アンビバレントな感情	.21***	.18**	.29***	.31***	.25***
否定的感情	.17**	.17**	.03	.03	-.07

** $p<.01$, *** $p<.001$

「私は、文化的に異なる人々を前にすると、話しづらと思う。」
「私は、文化的に異なる人々とかかわるのが楽しい。」等の、異文化に対する自信と喜び、また不安と回避など、アンビバレント(両価的)な項目から構成されたため「異文化へのアンビバレントな感情」因子と命名した。

第3因子は、「私は、文化的に異なる人々に対して、がっかりすることがよくある。」「私は、文化的に異なる人々は、心が狭いと思う。」「私は、文化的に異なる人々の意見(考え)を、受け入れられないだろう。」「私はしばしば、文化的に異なる人々とかかわることは、自分にとってあまり役にたたないと感じる。」「私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う。」等の、異文化への否定的で自文化中心的な感情から構成されたため、「異文化への否定的感情」因子と命名した。また、因子相関行列は、0.27から0.51であった。Table 1に因子分析の結果と因子間相関の結果を示す。

2. 信頼性および妥当性の検討

因子分析で得られた3因子について、内的整合性の信頼性係数である Cronbach の α 係数を算出したところ、「異文化への肯定的感情」が .85、「異文化へのアンビバレントな感情」が .82、「異文化への否定的感情」が .68 という結果が得られた。また、異文化間感受性尺度の構成概念妥当性を検討するために、先行研究と同様に (Chen & Starosta, 2000; West, 2009) に、異文化間感受性尺度全体得点および3因子の得点(異文化への肯定的感情因子、異文化へのアンビバレントな感情因子、異文化への否定的感情因子)と、社会的承認尺度、自尊心尺度、対人注意尺度、セルフモニタリング尺度、視点取得尺度との相関を算出したところ、弱い相関から中程度の相関が確認された。Table 2 に結果を示す。

3. 確認的因子分析の結果

因子分析のモデルの適合度を検討するため、Amos を用いた確認的因子分析を行った。3つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標は $GFI = .8914$, $AGFI = .772$, $RMSEA = .087$, $CFI = .792$, $AIC = 821.400$ であった。適合度にやや問題があると考えられたため、各因子を独立変数、各項目を従属変数とした回帰分析を行い、その結果有意な相関があった係数にパスを引き、再度分析を行ったところ、 $GFI = .901$, $AGFI = .868$, $RMSEA = .055$, $CFI = .925$, $AIC = 505.145$ となり、適合度は上昇した。

考 察

1. 因子構造について

本研究では、原版の5因子構造が確認されず、3因子構造が妥当であると判断された。つまり、異文化間感受性の構成要素である「異文化間へのかわり」、「文化的差異への尊重」、「異文化への自信」「異文化とかかわる喜び」、「異文化への注意」という異文化接触場面におけるさまざまな肯定的感情が日本では再現されず、本研究では、「異文化への肯定的感情」、「異文化へのアンビバレントな感情」「異文化への否定的感情」という、異文化間感受性の定義である「異文化への肯定的感情」とは性質を異にする感情群が抽出された。しかし、これらの要因間の因子間相関は中程度の正の相関を示しており、それぞれの要素間が互いに関連して異文化間感受性を構成していることを示している。

Chen & Starosta (2000) の因子構造が検証される一方で West (2009) と Fritz et al., (2005) は、アメリカとドイツにおける確認的因子分析の結果、安定して5因子モデルが検証できなかったとしている。したがって原版の5因子構造は、いまだ安定した構造としてのコンセンサスが得られていないため、本研究の結果を踏まえたさらなる検討が求められよう。

異文化コミュニケーションの領域において、Benett (1988) は、異文化感受性の文化的な相違に順応する能力として異文化間感受性をモデル化し、自文化中心主義から文化相対主義までの発展的な連続体として理論化した。このモデルは、自文化中心主義の段階と文化相対主義的段階的に分かれており、前者は文化的な差異そのものが否定され差異が最小化される段階、後者は差異の受容がなされ、差異への適応が進み最も高い段階ではその差異が統合される段階であるとされている。本研究で示された3因子構造が、連続性や段階性と捉えることが可能かどうか、今後は Benett (1988) をはじめ、他の理論との相似性や関連性を検討することが望まれる。さらに、アメリカやヨーロッパで検討されてきた5因子構造が日本においてはなぜ再現されなかったのかを検討するために、さらなる分析と理論的検討が必要である。

2. 尺度の信頼性と妥当性の検討

内的整合性の指標である信頼性 (α) 係数は、第3因子を除いて高い水準を示した。この結果から、信頼性はおおよそ担保されたと考えられるが、第3因子の項目数が他の2因子よりも相対的に少なく信頼性係数も低いことから、さらなる検討が求められる。

構成概念妥当性については、先行研究に倣い、異文化間感受性全体得点と各尺度の相関を検討した。その結果、全体得点については先行研究と同様の結果が得られ、その妥当性が確認されたが、いくつかの下位尺度においては因子によって異なる相関を示した(図2)。

社会的承認 (social confirmation) は、以前は印象報酬とされていた概念である。これは、他者に方向付けられ、他者に対して敏感であり、肯定的な感情で他者をサポートする、という3つの下位概念から成る共感能力を基礎とした能力である。しかしその後、他者からのセルフイメージの投影を認め、それを承認する能力という意味も加わり、社会的承認に概念名が変更された。社会的承認は、特に異文化間の対人場面において、その柔軟性や適応

に関連があるとされてきた (Chen & Starosta, 2000; West, 2009)。

本研究においては、肯定的感情とアンビバレントな感情は、この尺度との相関がみられたが、否定的感情については相関がみられなかった。このことから、異文化状況において肯定的感情およびアンビバレントな感情が、柔軟性や適応能力と関連があるが、否定的感情については、それらとの関連がみられないことが示唆されたといえるだろう。

自尊心 (self-esteem) は、「自己に対して肯定的、あるいは否定的な態度」である (Rosenberg, 1965)。一方社会学においては、他者と関わる際の社会的相互作用や知覚にも影響するとされている。例えば、特に対人関係場面において、自尊心は不安をやわらげる緩衝材になることが指摘されてきた (Boune, 2007; Greenberg, Psyszczynski, Burling, Simon, Solomon, & Rosenblatt, 1992; West, 2009)。とりわけ、一般に異文化間の状況においては、不安や緊張が高まるために、それらをやわらげる機能のある自尊心と、異文化間感受性の概念に何らかの関連性があると仮定された (Chen & Starosta, 2000; West, 2009)。以上のことから、本研究におけるアンビバレントな感情との相関は、異文化接触時において緊張や不安を感じやすいため、それをやわらげる自尊心との関連があった可能性がある。一方、肯定的感情は、異文化に対する肯定的感情が生起するため、緊張や不安が体験されていないため、自尊心とは関連のないことが推測された。否定的感情については、否定感情の生起によって、緊張や不安が体験されていないため、自尊心との関係に影響がなかったと考えられる。

自尊心に関するこのような機能は、セルフ・モニタリングにも関係があるといわれている (West, 2009)。セルフ・モニタリングは社会心理学の概念で、周囲の状況に応じて自らの行為を適応させることができるということに関わる (West, 2009)。Goffman (1967) によると、他者との相互作用の際には、自らの行動について修正的なプロセスが求められる。このため、他者からの反応などの社会的な手がかりを利用できるセルフ・モニタリング能力と異文化間感受性との関連が指摘されてきた (Chen & Starosta, 2000; West, 2009)。本研究においても、肯定的感情とアンビバレントな感情は、先行研究と同様にセルフ・モニタリングとの関連がみられたが、否定的感情についてはそのような関連がみられなかった。その理由として、否定的感情の特徴である、自らの価値観とは異なる異文化の価値観を受け入れ難いこと、また、自文化への優越感、すなわち自文化中心主義的傾向の高さが考えられる。これらの特徴から、周囲の状況や他者からの反応などを利用し、有効なコミュニケーションに生かす能力であるセルフ・モニタリングとは関連がなかったことが推測された。

以上のように、先行研究に準じた構成概念妥当性の検討をとおして、本研究で示された3因子の特徴を考察した。今後は、その他の妥当性の検討を含め、より詳細な考察が求められる。

3. 確認的因子分析について

確認的因子分析の結果から、「異文化への肯定的感情」因子、「異文化へのアンビバレントな感情」因子、「異文化への否定的感情」因子の3因子構造の適合度が確認された。このことから、本結果は、異文化間感受性の因子的妥当性を支持すると考えることがで

きよう。今後は、他の因子構造についても検討を進めることが求められる。

まとめと今後の課題

本研究では、異文化間感受性尺度を作成し、その因子構造を検討することを試みた。その結果、日本語版異文化間感受性の定義である、「異文化への肯定的感情」を構成する5つの因子構造とは異なり、「異文化への肯定的感情」因子、「異文化へのアンビバレントな感情」因子、「異文化への否定的感情」因子の3因子構造が見いだされた。これら3因子は相互に関連するとともに、確認的因子分析により3因子の妥当性が示された。また、社会的承認、自尊心、セルフ・モニタリングとの妥当性の検討から次のような特徴が示された。

「異文化への肯定的感情」は、異文化状況における柔軟性や適応能力と関係し、他者からの反応などの社会的な手がかりを利用した有意義なコミュニケーションと関係があった。「異文化へのアンビバレントな感情」も、異文化状況における柔軟性や適応能力、セルフモニタリング能力と関係するが、異文化接触時には不安や緊張が高まることが推測された。「異文化への否定的感情」は、異文化間の対人場面における柔軟性や適応能力と関連がみられず、また、異なる価値観の受け入れ難さや自文化中心主義的な態度が優勢なため、社会的な手がかりを利用する能力であるセルフ・モニタリングとは関連のないことが示された。

以上のように、本研究では、新たな異文化間感受性の因子構造に関する知見と、今後の検討課題が示されたといえよう。

異文化間感受性は、文化的コンピテンスを構成する要素の一つとして、日本で1990年代以降、異文化間能力（山岸, 1995; 加賀美, 2006）という文脈のなかで研究されてきた。

一方、異文化間感受性の概念は、教育や異文化コミュニケーションの領域だけではなく、対人援助職における能力としてその重要性も早くから指摘されてきた（野田・井上, 2008; 鈴木, 2015）。なぜなら、異文化間感受性は、異なる文化を認識し尊重する態度を促進する役割（Fritz et al., 2005）, 異文化状況において文化的差異に関する気づきをこうした獲得するプロセスへ影響を与えると考えられているためである。こうした実証的研究は欧米諸国ではすでに始まっている。日本の総人口中の外国人は2015年現在、約170万人を超え、全人口の1.6%を占める。日本社会は確実に多文化化の様相を示しており日本においても異文化間感受性の実証的研究の蓄積が一層求められている。

引用文献

- Benett, M.J.(1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity, *Intercultural journal of intercultural relations*, **10**, 179-196.
- Benett, M. J. (1988). Foundations of knowledge in international educational exchange: Intercultural communication. In Reid(Ed.), *Building the professional dimension of educacatinoal exchange*. Washington, D. C. NAFSA.
- Bronfeenbrenner, U., Harding, J., & Gallwey, M.(1958). The measurement of skill in social perception. In McClelland, D.C.(Ed.), *Talent and society*. NY: Van Nostrand.
- Bourne, R.(1995). *The anxiety and phobia workbook*. New York : New Harbinger.
- Cegala, D, J. (1981). Interaction involvement : A cognitive dimension of communicative competence. *Communicative Education*, **30**, 109-121.
- Chen, G. (1997). A review of intercultural sensitivity. Paper presented at the biennial convention of the pacific and Asian communication association, 2 -14.
- Chen, G., & Starosta, W.J. (2000). The development and validation of the intercultural sensitivity scale. *Human Communication*, **3**, 1 -15.
- Davis, M.H.(1983). Measuring individual difference in empathy. *Journal of Personality and Social Personality*, **44**, 113-126.
- Deardorff, D.K.(2009). *The Sage handbook of intercultural competence*. 2nd Edition, N.Y. Sage Publications.
- Fritz, W., Graf, A., Henze, J., & Moelning, A. (2005). An Examination of Chen and Starosta's Model of Intercultural Sensitivity in Germany and United States. *Intercultural Communications studies*, **16**, 53-65.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face to face interaction*. Oxford, England : Aldine.
- Greenberg, J., Psyszczynski, T., Burling, J., Simon, L., Solomon, S., & Rosenblatt, A. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety buffering function. *Journal of personality and social psychology*, **63**, 913-922.
- Gudykunst, W.B., & Hammer, M.R. (1983). Basic training design : Approaches to intercultural training. In D. Landis, & R.W. Brislin (Eds.), *Handbook of intercultural training*, vol1, N.Y. Pergamon.
- Hoops D.S. (1981). *Intercultural communication concepts and the psychology of intercultural experoencies, Multicultural education: A crosscultural training approach*. Chicago: Intercultural Press.
- Hart, R.P., Carlson, R.E., & Eadie, W.F., (1980). Attitude toward communication and the assessment of rhetorical sensitivity, *Communication Monographs*, **47**, 1 -22.
- 石原俊一・水野邦夫 (1992). 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, **63**, 47-50.
- Jain, S. (2013). Experiential training for enhancing intercultural sensitivity, *Journal of cultural diversity*, **20**, 15-20.
- 加賀美常美代 (2006). 教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか：シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合異文化間教育, **24**, 76-91.
- Lennox, R.D., & Wolfe, R.N. (1984). Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.

- McClelland, D.C. (1958). Review and prospect. In McClelland, D. C. (Ed.) *Talent and society*, NY: Van Nostrand.
- 野田文隆・井上孝代 (2008) . 文化を理解する能力 (cultural competence) の教育とはどうあるべきか *こころと文化* 7, 112-113 .
- Random House Webster's unabridged dictionary (1998). Sensitivity, 1745, New York : Random House.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 桜井茂男 (1988) . 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて—奈良教育大学紀要, 37, 149-154.
- 鈴木ゆみ (2015) . 文化的マイノリティと多文化共生 藤田圭一・浮田秀一 (編) 『現代社会と応用心理学1 クローズアップ「学校」』 (pp. 235-244. 福村出版)
- 竹山典子 (2009) . 異なる文化的背景を持つ子どもへの臨床心理学的支援に関する研究 鳴門教育大学教育学研究科博士論文
- 山岸みどり (1995) . 異文化間能力とその育成 渡辺文夫 (編) 異文化接触の心理学その現状と理論, (p209-223, 川島書房)
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- West, L.C. (2009) . Evaluating the Intercultural sensitivity Scale with counselors in international schools. A Dissertation to the faculty of the school of psychology and counseling Regent University.
- Wheeless, E.W., & Duran, R.L. (1982). Gender orientation as a correlate of communicative competence. *Southern Speech Communication Journal*, 48, 51-64.